

面での変化を中心に行なった。

昭和40年代以降の販売本数の変化とその背景事情を照らし合わせてみると、丸亀団扇はイベント、キャンペーン用に多く用いられ始めてきており、販売量もそのような注文の有り様で大きく変わってきていることがわかる。このような商品のほとんどは昭和43年に開発されたプラ骨団扇であり、手工芸品を主に販売する扇子産地の京都や房州団扇の産地である館山とは産地の性格が異なっているともいえる。それと同時に丸亀の貼、販売業者はかつての間屋まかせの販売方法から徐々に脱しつつあり、自力で販売網を拡大しはじめている。大口の注文のほとんどは丸亀の業者が自力で開拓したルートを通じてのものであり、非業者による直接需要が丸亀団扇を支え始めているといっても過言ではないであろう。

販売本数も昭和40年代の低迷状態から立ち直ってきており、このまま新製品の開発と販路の開拓

に力を入れていけば問題はないとも思われるが、現地の人々の声より実際には様々な問題が山積していることも分かった。

まず、大口注文に対応するために貼、販売業者は機械化大量生産を促進しているが、それに伴い、下請け業者の仕事は減少する一方で、彼らの生活保障が気掛かりである。そして戦後最も息の長い香川県、丸亀両団扇商工業共同組合員は減少しており、業界の協調は乱れがちであることが分かる。これは丸亀の団扇業界で当初から存在した問題で、現在でもまだ解決されていないのである。また、一部の業者は採算が取れないほどに単価を下げて販売したり、運送費の削減にはほとんど興味を示さないなど全ての業者が合理的な経営を行なっている状態とは言えない。この問題を解決するためにも、全業者が一丸となって丸亀団扇の将来を話し合い、合理的な経営を実行に移すことが必要であろう。

## 山村地域における地域活動の維持と地域社会

—富山県氷見市の都市圏外縁山村の事例—

森 智 代

本研究は、山村地域において、戦後から現在まで続いている「地域活動」に注目し、その内容と継続要因を把握することを目的としている。

戦後、山村地域の多くでは、住民にとっての生活基盤の機能低下という方向で、変容が進んできたといわれる。しかし、そうした状況下にある山村地域においても、地域内完結的な、もしくは地域自体への働き掛けを志向した活動（本論でいうところの「地域活動」）が、ある程度存続している。これまで山村地域における地域活動を扱う研究は、活動の縮小化や後退の指摘にとどまるものが大半であった。本研究では、ともかくも地域活動は続けられているという認識から、その継続の意味を検討した。

具体的な方法としては、富山県氷見市の都市圏外縁部に位置する山間の一集落（坪池集落）を取り上げ、住民が関わる各種地域活動のうち、山村地域内で行われているものについて、機能別に1）自治的活動、2）経済的活動、3）余暇（文化）的活動の3つに分類し、考察を行なった。

その結果、次のような知見が得られた。

- ① 地域活動の内容には、集落、学校区、旧行政村といった地域スケールごとに特性がみられ、それぞれの地域社会のあり方が表れているものと考えられる。
- ② 本対象地域においては、各地域活動を支える主体集団が、既存の属性集団（各集落の自治会・青年団、校区単位の婦人会・老人会など）から適宜人員を動員することで組織されている。この動員システムが、地域内人口の減少等に抗して活動を継続させていくうえで、大きな役割を果たしている。
- ③ 地域活動の継続の背景には、①のような、自らの地域に対する、住民の特定の要求の存在があると考えられる。本対象地域の場合、それらの「地域的要求」としては、社会資本整備・経済的基盤の確保・賑わい・地域的個性の確保などが、挙げられる。

現代日本の山村地域は、困難な状況下にあるがゆえに、そこから生じてくる特定の要求によって

動かされている社会として、把握され得るといえるよう。

## 都市キャノピー層と都市境界層界面付近における 気温特性に関する考察

山下 恵

都市気候の研究は様々なフィールドにおいて必要であり、年々増えているが、都市内外の水平気温分布による比較が多く、垂直方向の気温分布についての比較はまだ少ない。本研究はオーク(1978)の定義する、建物屋根の高さから下を都市キャノピー層、その上を都市境界層とする境界層の理論に当てはめる研究対象地域を検討した。都市キャノピー層と都市境界層との界面では、熱交換の行われるためキャノピー層内の気温の影響を受けると言われている。

そこで明治神宮から高井戸にかけて一般道・高架道においてオートバイによる移動観測を行った。都市キャノピー層と都市境界層との界面付近の気温の実態を明らかにすることを目的とし、オークの定義に基づいて考察する。

オートバイを使用する観測は、従来の研究でも例はなく新しい観測方法でもある。オートバイを使用することにより短時間で済み、また自動測定記録装置とテープレコーダーを使用することで、一人で観測を行えるという利点を持っている。

観測対象地域は明治神宮から高井戸にかけての約9 km 区間の一般道・高架道である。対象区間のうち、スタート地点(明治神宮)から1.5km ~ 8 km 区間は甲州街道でビルに囲まれた都市キャニオンを形成している。0 km ~ 1.5km 区間

と8 km ~ 9 km 区間は住宅が多くビルは少ない地区である。

1995年9月から11月にかけて夜間22時に行った計8回の観測結果より、以下のことが明らかになった。

(1) 甲州街道区間の高層ビルに囲まれたキャニオン内では、周辺のノイズが多いこともあり、高架道よりも一般道の気温が高温であった。

(2) 都市キャニオンを形成する甲州街道区間で、地上付近の気温は都市キャノピー層内にある高架道の気温に多少の影響を与えるが、都市境界層の高さまで達すると、都市キャノピー層内の熱は上方に奪われ、気温の影響はほとんど受けていない。

(3) 高層ビルに囲まれない区間では、都市キャノピー層の高さが低いこと、建物の密度が小さいこと等から、都市キャノピー層内の熱は、都市境界層との界面付近から活発に奪われ一般道と高架道の気温差は小さい、もしくは逆転する。

以上の結果より、熱交換の行われる都市キャノピー層と都市境界層の界面では、都市境界層は都市キャノピー層内の気温の影響を受ける、とは必ずしも言えない結果がでた。

今後も観測を続け、時間的・季節的变化による違いを明らかにし、都市大気における境界層の理論を再検討することが課題である。

## 1994年松山市における渇水について

山本 貴子

1994年は、太平洋高気圧の発達により全国的に高温少雨となり、渇水のため多くの人々が、給水制限などにより不自由な生活を強いられた。その中で松山市も、7月から10月までの長期間にわたり給水制限が行われた。

もともと松山市は、降水量が少なく古くから渇

渇に力が注がれた地域である。しかし、上水道が整備された近年でさえ具体的には対策は取られていなかったが、毎年のように渇水が心配されてきた。近年の渇水は、いろいろの所で言われているように人為的要因が大きく関係している。しかし今回は、渇水という問題を気候学的に解析、考察